

穏やかな笑みを振りまく彼を見て、妙に胸がざわつく。不機嫌になる自分に気づいて、首を傾げた。

(……どうしたんだろ、僕)

女性には人気があって当然の男だと知っている。それを改めて目撃し実感しただけだ。それなのに。

考えたくない。気づきたくない。

だから、帝人はきびすを返す。臨也だって女性たちと楽しそうに話しているのだし、今、帝人が姿を見せても嬉しくはないだろう。ならば待ち合わせにはいけなくなったとメールでもして、今日は逢わないでおう、と思う。

その方が、きつとお互いのためだ。

(うん、そうだよね)

行くあてもなく歩きだし、そのままアパートに帰ろう、と思う。下手に池袋の街を歩いて臨也たちにまた遭遇しても反応に困るだけだ。とりあえず道の端に寄り、臨也に急用ができていけなくなった、という内容のメールを送信する。

(早く帰ろう)

帰って、宿題をして、それからダラーズの掲示板もチェックしよう。臨也と逢わないなら逢わないで、やることなんていくらかもある。

そう思うのに、未だ心はざわつくばかり。考えない方がよいのに、臨也のことを考えている自分がいる。

今まで、臨也の方からキャンセルメールを送ってきたことはあったけれど、そういうえば帝人から送るのは初めてだ。

学生は基本あまり予定外の事態がおこらない。委員会がある日は決まっているし、授業が大幅に延びることもない。ホームルームも特に長引くこともない。誰かに誘われていても、あらかじめ臨也との約束があれば先約があるから、と断っていた。

臨也の方は、といえば、情報屋という仕事柄、時間が不規則になりがちだ。急に時間ができたから逢おう、と言われることもあれば、約束していても仕事が入ったから、とキャンセルメールが来ることもある。そういう仕事だと知っていたし、『恋人ごっこ』のバイトでしかないから、急すぎると慌てることはあっても、約束したのに、と立腹することはなかった。

——帝人君とつきあうのって、なんていうか、すごい気楽で良いよね。

そう言っていたのは臨也と二人で静雄と遭遇した日、つまり一昨日のことだ。鍋をつつきながら、臨也はそんな言葉紡いだ。

女性相手にはいろいろな気を使うだろうし、男同士の方が気楽だ、という感覚は帝人にも理解できた。女性と一緒にいるのはそれはそれで楽しいけれど、やはり緊張する。臨也は緊張はしないだろうが、それでも男女の違いはあるのだろう。

そうですか、と帝人は曖昧に笑ってうなずいたけれど、実のところ、それを喜ぶ自分がいて、内心首を傾げていた。なぜ、臨也のそんな何気ない言葉を自分は喜んでいいのか。